伊達文化保存会蔵・伝後光厳院筆〔物語残簡〕（『雨やどり』）

―解題・翻刻

石澤一志

はじめに

財団法人宇和島伊達文化保存会と宇和島市立伊達博物館（愛媛県宇和島市）は、伊予・宇和島藩藩主であった、伊達家ゆかりの道具・文書等を保存管理し、それらを今に伝えておられる。このたびご厚意により、ご所蔵にかかる古典籍類のいくつかを調査する機会に恵まれたが、その中に、後光厳院を伝称筆者とする、物語の古写本が見出された。

「後光厳院宸翰」として整理されているそれは、一見して、伏見院に始まる持明院統の歴代天皇がよくした勅筆流の筆跡で写されており、書写年代は鎌倉時代後期から南北朝期を大きく下らないものと見られる。そしてその内容はこれまで未詳とされてきたが、今回改めて調べてみたところ、室町時代物語の一つとされる、『雨やどり』の本文とほぼ一致することがわかった。[1] よって、この物語の成立が、少なくとも鎌倉時代後期頃まで遡りうることは、ほぼ間違いない。また、現行『雨やどり』の本文と比較するに、かなりの本文異同が認められる。この本の出現により、成立的にもまた内容的にも、さまざまな問題が浮上してこよう。

それら詳細な検討は今後に譲り、本稿ではひとまず、当該本そのものの紹介を行うとともに、その本文を示したいと思う。

書誌解題

伊達文化保存会蔵、作品整理名は「後光厳院宸翰（未詳物語）」。巻子本一巻、袋綴冊子本からの改装本。大きさ、縦二一・六糎、古代裂表紙を付す。見返しは、流水に草木蝶下絵を金銀泥で描いた装飾料紙をあしらう。改装されていることは、本紙の一部に綴じ穴の跡が見られることや、一紙の中央部分に見られる折り目（元の柱の部分）と、その下部の手沢跡およびそこを中心とした左右対称の虫損・汚れなどから判明する。ただし現状

に於いては、糊継ぎの部分は全てはがれてしまっており、一紙づつ、バラバラになっている。裏打紙には銀切箔を散らす。一紙の大きさは、縦二一・六糎、横は二八・〇糎、冊子本の状態の時にはその半分の、一四～一五糎ほどの大きさであったものであろう。紙数は三七枚で、全紙に墨付きがある。全ての本紙右上に鉛筆書きで通し番号を振った小紙片を貼付するが、内容的な順序とは必ずしも一致せず、途中に欠脱部分も存する。冊子から巻子への改装の時期と、それが剥がれて本文の順序が分からなくなってしまったのは何時頃のことなのか、正確なところは不明である。付属の桐箱の表書に「後光厳院宸翰」、蓋裏に極書き「もの語一巻　帋数卅七／つく〳〵とたち給へり　古筆了意（琴山印）」とあるのによれば、古筆了意が鑑定した時点[2]ではまだ、本紙の順番には混乱が生じていなかった可能性がある。本文料紙は斐楮交漉紙、一面行数は、冊子本の状態で毎半葉八行から一〇行で書写される。字高は、一九・二糎前後。全体的を一筆で書写、伝称筆者の後光厳院の真跡かどうかは不明であるが、書写年代はその紙質と筆跡から見て、鎌倉時代後期から南北朝時代の初期頃と思われ、了意の見立ての通りであろう。

本文内容的には、物語の首尾部分を欠き、その途中にも欠脱が見られるという、いわゆる残欠本ではあるのだが、現存する『雨やどり』の諸本がほとんど江戸時代前期頃の書写であることを考えると、圧倒的な古さを誇る。また、現存本が三巻三冊で書写されているのに対して、当該本はそういった痕跡が見られず、全巻一冊と見られる。このような形態上の相違も、その内容を考えていく上で重要な情報を提供してくれるものと思われる。[3]

また本文の異同は枚挙に暇がなく、一見しただけでも、当該本が優れた本文を有するものと想像されるが、未だ諸本間の十分な本文の比較・検討を経ていない段階での軽々な判断は避け、まずは本文のみを提示する。その本文上・内容上の特質などの詳細な検討については、今後の課題としたい。

［注］

（1）国文学研究資料館准教授・齋藤真麻理氏の御教示による。記して謝意を表する。

（2）冒頭の書き出し部分を「つく〳〵とたち給へり」としているが、これは現在の通し番号によれば、第一七紙目にあたる。現存『雨やどり』の本文の順に従って並べ替えると、残欠本である当該本の中では、最初の部分となる。よって、この時点では一応本文の順番は本文の筋のままであった可能性が高い。この時既に冊子本から巻子本に改装されていたものと思われるが、それが巻子本として一巻の形態であったのか、現在のようにそれが剥がれてしまい、一紙づつの状態になっていたのかは不明だが、おそらくは前者の状態で、巻子本に改装される時点で本紙には一部欠脱が生じ、何の物語か、その内容が分からなくなっていたのであろう。

ちなみに古筆了意は古筆本家九代目。宝暦元年（一七五一）～天保五年（一八三四）八月六日没、八四歳。元は神田家第六代、神田定常。天明三年（一七八三）七月三一日の古筆本家八代了泉没後、古筆本家を継いで名を了意と改める。箱蓋裏の極めに年紀は記されていないが、

天明三年から天保五年の間の鑑定ということになる。猶、当該本には、この時の鑑定に関わるかと思われる文書・添書きが二通付属しており、それらの解読により、今少し詳しい伝来の情況などを明らかにし得ると思われるが、今は暫く措き、これも今後の検討に譲る。

（3）『雨やどり』本文については、『京都大学蔵　むろまちものがたり』二所収、奈良絵本挿絵欠三冊本（京都大学国語国文学研究室編、解題担当・金光桂子）を参観した。

［付記］

本論を掲載するに至った経緯を記す。二〇〇八年八月、当館の研究プロジェクト「学芸書としての中世類題集の研究」の研究会を愛媛大学で行った。帰途メンバーのうち石澤一志・伊藤善隆・久保木秀夫の三名が、同プロジェクトの一環として、宇和島伊達文化保存会にも赴いた。主目的は中世類題集に関する古筆資料の発掘だったが、併せて『宇和島伊達家伝来品図録』（二〇〇七年三月、宇和島市立伊達博物館）に掲載されていた数点の古典籍類についても閲覧させていただいた。その結果見出されたのが、当該「伝後光厳院宸翰」なのだった。

さらに閲覧の際、宇和島伊達家ご所蔵の文化財の中には、古典文学に関する古典籍類が大量に含まれており、しかもそれらのほとんどが未調査である旨をうかがった。そこで当館の事業の一環として、宇和島伊達家ご所蔵古典籍類の調査収集をご許可いただけないかとお願い申し上げたところ、前向きにご検討いただけるという大変ありがたいご回答を頂戴した。早ければ二〇〇九年度からの調査の開始をご許可いただけるよう、現在種々の調整を行っているところである。

本論はその調査収集の予告を兼ねて、当館の国文学文献資料調査員でもある石澤一志氏に執筆を依頼したものである。図版・翻刻掲載をご許可下さった宇和島伊達文化保存会理事長の伊達宗信氏、及び伊達事務所・宇和島市立伊達博物館などの関係者の方々に、心より御礼申し上げる次第である。

（久保木秀夫）

凡例

一、伊達文化保存会所蔵、伝後光厳院筆〔物語残簡〕の本文を翻刻した。

一、翻刻に際しては、出来る限り底本の雰囲気を残すようにし、仮名遣い・送りがな、漢字表記・傍記などはそのままとした。

一、漢字は通行の字体に改めた。

一、虫損・汚損などにより、判読困難・不能の文字は、一字の場合は□で、二字以上は［　］でそれを示した。重ね書きは、下の文字が判読可能な場合はその文字を（　）で囲んで本行に示し、重ね書きした文字は右傍記した。判読不能な場合はその箇所を（□□□）とし、同じく重ね書きした文字を右傍記した。また、ミセケチは‖で示し、訂正された本文を傍記した。

一、残画などから推読可能な場合の読み、および意味不明と思われる部分における私注などは（　）に入れてそれを示した。また、誤脱・衍字等、不審の箇所には（ママ）と傍記した。

一、袋綴の折目の部分は……を入れてこれを示した。

一、一紙ごとの終わりは　　」（第一紙）のようにして、これを示した。その紙数の通し番号は、現在本紙右上に貼り付けられている、鉛筆書きで振られた番号によるものだが、現存『雨やどり』の本文に従って、これを筋通りに並べ替えてこれを示した。

」（表紙／見返し）

つく〳〵とたち給へり中納言は人しれす御心にのみ
か、り給ていかにぬるらんといたはしくおほして
御めのとにこゝに雨にしのひてたち給へる人この
つまへいれ給へとおほせられけれはかさなとさゝせ
て女房をいたしてあやにくなる雨はやかても空
はれかたく侍れはこゝにたちよらせ給てはれまを
またせおはしませと申けれはひめ君の御めのと
なさけある人かなとうれしくおもひなからこれも
……
ほととをからぬたよりもさふらへはいまちとこゝ
に□□（有てカ）やすらひ侍なんおほしめしよりてかく
うけたまはる御うれしさなといひけれはまたをし
かへしなにかくるしく侍へきたちよらせ給へと
あなかちにきこゆれはけにも又なか〳〵とたつも
中〳〵わひしなといひていり給ぬひやう風き丁
なとたてけれは人しれぬやつれもはつかし
なからしのひいりてぬれたるきぬともぬき
」（第一七紙）

かへてめのととかくもてあつかふ中納言殿めのとに
めしかへぬへき物なとたてまつれとおほせらるゝ
かい〳〵しくきよけなる物ともいたしぬひめ君の
御めのとこれほとまては思よらぬ心ちしなからとかく
物なとすゝめ申けれともくるしさわひしさも
一かたならぬ心ちしてやかてよりふし給へり中納言は
大将のたゝひとり御子にておはしますうへ
よろつ人にすくれ給へるゆへに世のおほえも
……
ならふ人なくそおはしけるひめ君もち給へる
人は我も〳〵とおほしめしけれともいつとなく世の
はかなきことのみ御心にしみてさため給へる人も
おはせさりけるかいかなるさきの世のちきりにや
このひめ君を御らんしてわりなく御心にかゝり
つゝゆかしくおほしめしけるほとに雨にことよせ
てたちいり給へり夜もふけ人しつまりて
中納言こととはすちやうのうちへしのひいり給へは
」（第二四紙）

ひめ君はゆめうつゝともおほえたまはすあきれ
給てさらに物もおほえぬけしきなりめのとうち
おとろきていかなる人にてもおはしませかゝる
あやしき御ありきもおもふやうありてこそ
せさせたてまつれおほしめしあなつるにやなと
いひておしのけたてまつれともさらはなにことに

あるしの申まゝにたちよらせ給ふそなといひ
まきらはしていとなれかほによりふしたま□（ふカ）
……
とかくいへとも中〳〵かひあるましきことの給□
おもひあまりてこそかくもはからひぬれとて
のちには御返こともなしめのとちからなくて
やをらのきぬ女君はひとへにおそろしくあさ
ましくおほえ給てなきふし給へるをいとゝ
あはれにらうたくおほしてとかくなくさめ
かたらひふし給へりいかなるさきの世の契にや
わりなく千夜を一よにもなさまほしくおほえ
給へとも夏（なつ）の夜なれはほとなくあけにけり
さもなからつゝむへき所ならねは日たかくかたらひ
給ふとしの程十五六はかりにやまことに
はつかしくわりなきことにおほえけるもこと
はりにらうたくたちはなれかたくおほえ給へと
あまりにうちつけに人めもつゝましけれは
いと名こりをしなからおきわかれ給ふかくても
けふはあらまほしけれともかた〳〵おほやけことに
……
ひまあるましき日なれは内へ参り侍へし
こゝはおほつかなかるへき所ならねはゆめ〳〵御心
かわりし給なかゝるおもひよらぬたよりもあさ
からぬ契のほとをしはからせ給へとて
さなへとるたこならねともなかたちて
ねみてそふかきちきりしらるゝ
御たゝうかみにいとうつくしくめもおよはぬ
心ちしてわかき女房もてまいる御めのとこれも
」（第二二紙）
この世ならぬ御ちきり又くわんをんの御ひき
あはせなれはゆくすゑもたのもしく侍にむけに
人のあまりに物をつゝむも中〳〵あしきことなと
いろ〳〵にそゝのかしたてまつれはけにとはおほし
なからつゝましさふてをとるへき心地もし給
はねともあまりにせめられて心ならすいさゝか
名のみしてをふるあやめのふかくても
ひかれけるこそくやしかりけれ
……
とかきてうちをき給へるを御めのととりて
ありつる人にとらするとてさてもいかなる人にて
わたらせ給ふそととひけれはつゐにはきかせ給
なむとてかへりぬいつしかと御らんすれはてなと
おしはかりにもすきてうつくしけれはうちをき
かたく御らんして御めのとにこの人ゆめ〳〵かへし
」（第二三紙）

給ふなしはしみむとおもひ侍るとねむころに
のたまひをきていて給ふひめ君は雨やみなは　」（第二一紙）

とくかへりなむとおほしけれともあしもいたく
たちいてむ人めもはつかしくあんせられ給ふ
御めのともことはりにおほえけれはしる人のもとへ
くるまをとりにつかはしたれはかい〳〵しくやかて
たてまつれりうれしくおほえていつるほとに
さてもわすれかたき雨の御やととかくきこゆるも
おろかなる心ちし侍なとうちへい、入たりあるしは
中納言のさしもかへしたてまつるなとおほせこと
……
ありつれともいかなる人にてかおはすらんもし
おもひつき給なはせんなかるへき事にもやなと
思ひてまことにおもひかけぬ御たよりこれをしるへ
にてかまへてわすれぬ事にてなとたゝ
おほかたにいゝなしたりつまとのもとへいて給ふ
にも一かたならすしのひかたくてきえぬへき
心ちし給へは御めのとことはりとはおもひなからはしめ
たることにいたくなおほしいりそいまわしくなと　」（第二〇紙）

（一紙分欠）

とかき給へるを御らんするにいと、おもかけ恋
しくかなしけれはなきふし給へるを御めのと
みたてまつりてこれほとまてとはおほえす
くやしうもあさましきことかきりなしむなし
きとこにふし給へるをりふし時鳥なきて
すくるも我をとふかといと、あはれも身にしみて
　ほと、きすはなたち花のかをとめて
　なく〳〵こふる我そはかなき
……
とうちなかめ給てさてもおやのあるとい、し
かはしられしといそきかへりけるにやいかてその
人とたしかにしるたよりもかなと神仏にいのり
給ふよりほかのことなしさのみこ、におはすへきにも
あらねはこの人のあふきとたちはなはかりをかたみ
にていて給ふみちすからめのともつらく我か身
もうらめしくてとのへおはしつきてもあるにも
あられぬ心ちし給ふひめ君はめのとの心の中さへ　」（第三一紙）

はつかしくてい、たにいて給はす御心のうちにさても
一夜のゆめの行えたにその人としらぬかなと人
しれすなけかれ給ふとにかくにか、るうき身

はいきてもかひなし霜ゆきならはきえもうせ
まほしくおほしなけくめのといまこそありとも
くらまのむまとによりてはつせへまいりし
下かうのことにてあれはほとけの御しるへうた
かひなしとおもふはかりをたのみなり中納言は
……
日にそへてわすれかたく恋しさのみまされは
この人の行えしらせさせ給へと神仏にいのり給ふ
た、あさ夕はあふきとたち花を御らんしてそ
なくさみ給ふち、母も御ひとり子にておはしませは
いつとなくなかめかちにておはするを心くるしく
おほしてさいしやうときこゆる人の御むすめ
なへてならぬ人ときけはかよひ給て心をもなく
さめ給へときこへ給へともよろつ物うけにて
」（第三四紙）

とかくものもの給はすいかなることにかとはゝうへ
なけき給ふことかきりなし中納言は雨やとりの
人のおもかけ身にそふ心ちしてすこし給ふ
さきの世にちきりやふかゝりけむ一夜のゆめに
た、ならすさえなり給てなやみ給ふをめのと
みしりたてまつりてこはいかなる事そまた
いかゝせむとあさましくおもひなからちからなき
御ちきりにこそとおもふほとにすてにその月にも
……
なり給へは御心のうちにもいかになりゆく我身
そと一かたならぬ心ちしてたとえんかたなし
めのとはいかにして人にしらせてたいらかに
みたてまつらんいかなることもおはしまさは
いかゝせんとしつ心なくかなしくおもひけり
さてもわらはかあねこそたゝいまの女御の御めのと
にてつねはむつひかはしてひめ君をも時〳〵は
わたしきこえて御心をもなくさめかしなと
」（第一四紙）

つねはかたらひけれともちゝ君いかゝおほさむとは、
かりてすこしけりこの人そむつましく人にも
もらさすいゝあわするかひあらんとおもひいて、
やかてふみかきてつかはしけりよろつこまかなる
ことは身つからとかきたりおりふしさとなる
所に侍るかならすまちたてまつるへしひめ君
いつとなく御ゆかしくおほさせ（ママ）をはしますなと
こま〳〵と返事ありまつうれしくてやかてひめ君
……
御くるまにのせたてまつり我身ものりてし
のひておはしける女御の御めのとまちつけた

てまつりてむかしいまの物かたりしてはゝうゑの
おはしまさはよもかゝるふせ屋へあからさまにも
たちいらせをはしまさむさもうつくしくお（いゝ）て
させをはしましぬるかなうちにさもとゝきめき給
人〳〵の御むすめたちの中にもこれほどなるはおはし
まさすあたらしき御ありさまかなとて御くしおしやり
てつく〳〵とみたてまつりてめのとにさてもめつらしき
御ありさまにみなしまいらせて侍はひかめにやといひ
けれはとかくいゝいてむもつゝましくていらへもせねは
なにことなりともへたて給ふへきに侍らすいかなる御
ゆへにかとといけれはもとよりこの御こと申あはせ侍
らんとてこそかくもくしたてまつれとてはしめよりの
ことこまかにかたりけれはちからなきさきの世の御契
にてこそ侍らめいたくなけき給そほとけの御はか
らひなれはたのもしくおほしめせこれにてはしる人
侍ましなとかい〳〵しくいひなくさめけれはうれしさも
……
かきりなしひめ君これをきゝ給ふにもはつかしく
かなしくせんかたなきまゝに御なみたのみところせく
けにもろこし舟もよりぬへくみえ給ふもことはりと
いたはしくてとかくいゝなくさめたてまつるめのとは
」（第六紙）

たいらかにおはしまさはいかゝしてはくゝみたてま
つらむなと夜もすからあむしつゝあか月かたにまとろみ
たるゆめにひめ君の御かたよりあさやかに日いて給へり
みれは御ふところより光いて給ふをはつせのへつたうと
おほしき人袖にうけとりてうちへ参り給ふとみて
うちおとろきぬれいならぬゆめのさまかなと思
ゆめときをめしてかたりけれは世になきほと
めてたき御夢なりおもひかけす國王のむま
れ給へきとうらなひけれはあまりにふしき
さにさるへきことはなけれともよきことはめて
たしとの給へはさりとてはついにかくれあるましと
申けれはいかさまにもさやうならむをりはかならす
よろこひを申さむとい、て返しぬひめ君に
このよしをかたり申けれとも御みゝにもいれす
……
おもひうつもれてそおはしますをりふし雪
いたくふりてあとよりほとなくきゆるもうら山しくて
ふる雪に我身をなさはよの中の
うきたひことに思きえまし
のきはのむめの風にちるをみるにもいまゝて
つれなくなからへてかゝる物思ふ身となることよと
」（第三三紙）

かなしくて
さそはるゝ花もろともにきえもせて
世になからふる身こそつらけれ
」（第三二紙）

なとなかめ給て御心地れいよりもくるしけに
おはしませは御めのと心も心ならぬ心ちしていかゝと
申けれともはつかしくていらへもし給はすうち
そはみておはしけれは心くるしくてちかくよりて
みたてまつれはつゝむにもしるき御けしきまこと
にいたはしくおほえてともになみたのこほるゝを
まきらはしていたりこのほと女御も御くわゐにんと
きこえしかちかきほとににや世の中ゆすり
御いのりなとひしめきけれともこのまれ人のみすて
……
かたくおほえけれはもろともにさとゐして女御の
御めのと御くしゆい御ゆなと申ほとにたいらかに
おのこにてむまれ給ふひめ君かゝるついてにき
ゆるわさもかなとおほしめしけれとも心にまかせ
ぬ御いのちさえうらめしくおほえ給ふ御めのと御ゆなと
すゝめたてまつれともつゆもみいれ給はす心くるしさ
かきりなしさてむまれ給へるちこをみたてまつれ
はうつくしさよのつねならすこれをいかゝしてそたて
たてまつるへきと人しれすしのふことなれは御ち
」（第五紙）

なとよそよりたつねかたし我もとにはさりぬへき人
もなしなとわひけれは女御の御めのといかさまにも
とりあけたてまつりていかなるやうもあるそかしなと
いゝあわするほとにうちよりなとやいまゝてまいり給はぬ
とく〳〵と申けれはとる物もとりあへすくるまよする
ほとも心もとなき心ちしていそき参りぬ女御をみたて
まつれはゆゝしくなやみ給ふちゝおとゝはゝうへなと
おとろきさはき給ふことかきりなし御いのり山〳〵寺〳〵
御つかひひまなしいまた春宮もおはしまさぬほとに
……
あはれわうしにておはしまさはいかにめてたからまし
とおもひあへり女御きさきあまたおはします御
なかにすくれ給へる御おほえなれは御つかひかすしらす
御いのりともいたらぬくまなくつかうまつるうちの御
おとゝ宮とうくうにたち給しかともほとなくうせ
給しかはかまへてわうし御たんしやうといのり申せと
おほせくたされしかはかたへの女御かういそねましく
そおほしめしける一日なやみくらさせ給て日くるゝほとに
」（第二九紙）

やう〳〵にむまれさせ給ぬ王子にてはわたらせ給へとも

さらに人のかたちにてもおはしまさすおにことかや
いふ物にてやとみたてまつるに心もきえはて、いかゝ
すへきとかなしくおほしめしけりうちにきこしめさんも
めんほくなく女御たちのき、給はんもはつかしく
せめて御かたち人にてもおはしまさはこそうせ給ふ
とて人にもみせたてまつるへきいかゝせんとおもひ
大事になやみ給ふほとにはち給ふやうにもてなして
うとき人はちかうもまいらすうちより御使ひまなけれ
……
ともいまた〳〵とのみ申けれは御いのりの御使雨の
あしよりもしけく世の中ひゝくそねましく
し給かた〳〵にき、給ましかはいかにうれしくおほさんと
はゝうへ身にかふる物ならはいのちにもかへたてまつる
へくおほしこかれ給へは女御の御めのとちかく参りて
申けるはこのことうちへ申侍らむもめんほくなし
しのひやかにこのさとなるちこにとりかへたてまつら
はやと申けれは北のかたおなしほとなる人ならては
いかゝすへき又あまりにいふはかりなきことなれはたゝいま」（第二八紙）

のはちをかくすわさもかなともたへ給ふほとにこの
ちこのことくわしうかたり申て昨日はそれゆへに
おそくまいり侍しなとこまかにかたりたてまつり
うつくしうおはしますよしき、給てすこしむね
あきたる心ちしてたとへたゝ人にてわういをつき
給ふまての事こそなくともいまのあへなさはちを
かくすわさたにもあらはとく〳〵とりよせ給へみて
はから（ひ）へしとのたまへはめのとふみかきてとく〳〵
くしたてまつり給へくわしきことはこゝにて
申侍らむとてつかはしたりひめ君の御めのとなにことに
……
かとおもひなからむかへのくるまにのりてまいりけり
ひめ君さすかに心もとなくおほしめしけりつほねへ
くるまをよせて女御の御めのといそきいてゝかゝる
ことくわしくかたりかた〳〵にめてたかるへき事
なりといゝけれはいかゝしたてまつらんとおもひ
つるにうれしき事にこそとそ申ける御めのと
ふところに入たてまつり女御の御ふところへうつしたて
まつれははなやかにしもなきいて給へはちゝおとゝ
御せうとのかんたちめいかに〳〵とゝい給ふわうしにて」（第二七紙）

わたらせ給ふよし御めのと申けれは悦給ふことなの
めならすうちへもこのよしそうしけれはよろこひ
おほしめすことたとへんかたなしやかて御はかせ
まいらせらるさてもひめ君の御めのとにはことさら

とて女房の正そくさらぬ物ともさま〳〵にたひけり
ゆめときか申つることいつしかおもひいて、ふしき
にもうれしくおもひけりありつるかたつかたの人は
ふかくしのひてひきつゝみていたしやりけり
いつしか御ゆとの、きしきいわすともをしはかるへし
……
ないしのすけ御ゆめさせけりくきやう殿上人のこる
人なくまいり給ふみなしろき、ぬをかつけ給ふ
北の方御めのとこれをみるにもかゝることのなから
ましかはいかにくちをしからんなとかたらひ給ふ
王子の御て、にはそつの大納言さたまり給ふ一宮にて
おはしましけれは内の御よろこひかきりなし
御うふやしない我も〳〵とつかふまつる御ひきいて物
心をつくし我をとらしといとなみめつるた、をし
はかるへし七日すきていつしかと行幸ならせ
」（第二六紙）

おはします御ともにのこるくきやう殿上人なし
王子うつくしうさえおはしませはいよ〳〵御おほえも
めてたくかきりなしおと、はうれしとも □（か？）きり
なくすやかて行幸のしるしとてあるしのおと、
太政大臣北方は二位殿とそきこえ給ふ女御は中
宮になり給少将は中将になりかた〳〵思ふさまなる
御よろこひなりかたえの女御たちうら山しくも又
むねふたかり給ふ人おほし日数すきはわか宮は
うちへいらせ給ふへし三月すきはやかて春宮にたち
……
給ふへきにさたまりけり日にそへてひきのふる
やうにうつくしさまさり給ふさてもはい、て給し
ふるすゑも中宮御心に入ておとつれ給ふほとに
さひしくあはれなりしこともやう〳〵よのつねさまに
なり給へはあさましかりしことも、か、る契にや
いつしかなくさみ給ふさのみめのとのもとにわたらせ給へ
きにもあらすとて心ことにひきつくろひてとのへ
わたしきこゆ人もおとろくほとにしたて、そ入
たてまつるま、は、の君あやしきことかなこのほと
」（第二五紙）

なか〳〵とこもり入ていかやうなることをしいて給て
おやにはちかましくくちをしき名をくたし給
なとおもひかけぬこととをのたまふめのとわら
わかあねにて~~おはへる~~（はんへる）物、うちにさふらふか見ま
いらせてあまりに御いたはしくいらせをはしまさんも
みくるしとてめさせ侍ると申けれはさもあらし
この夏ころよりいやしきほうしにかたらひ給と
き、しはまことなりけりとの、き、給ていかに

いみしとおほせられんとまことににくけにいゝすてゝ

……

うちへ入給ぬめのとくちをしきことをもの給かな
まことのをやにておはしまさはあることなりとも
しのひ給へきにつゆほともあとなき事をおほせ
ことあるうらめしさよとおもひけりひめ君はま
してきゝ給ふよりいとゝはつかしくかなしくて
なくよりほかのこともなしめのとなきことなれは
つゐには申はれなんさのみおほしめししつませ
おはしますへきことにも侍らすとなくさめたて
まつる大納言うちよりいて給けれはいつしかとまゝは、　」（第一紙）

のたまふやう申につけてまはゆく心うけれとも
御ためきゝにくきことはあまりにあさましくて
申侍なりわか身もひめ君あまた侍れはいつれも
おろかならすおもひたてまつるにたいのひめ君
この夏の比よりいやしきほうしにかたらひ給けり
おやのきゝ給はんすることもとてきぬあやいろ〳〵の
物をゝくりけるよしきくことのあさましさ心うく
まことしからねともたしかなるやうに人のかたり
侍りしとの給へはいかやうにもあれかしつくこならはこそ

……

いつくゑもおいうしなひ給へとのたまへはさては
ほうしこそよろこひ侍らめたゝめのとかしはさに
こそ侍らめそれをこそおいもいたし給めとの給へは
ともかくもはからひ給へとのたまふさてもわか宮日々
にうつくしくなり給へはおほちおとゝ世に
なくかしつき給ふことまことにことはりとそおほえ
ける中宮はこのはゝ君をむつましくおほしめして
おろかならすむつひかはし給ける日数もすきて内へ
中富そいたてまつりてまいり給きしきをし　」（第一六紙）

はかるへし中宮の御つほねもとはれいけいてんなり
けるをいますこしもちかくとおほしめしてしよう
きやうてんにそすませをはしましけるうゑはわか
宮の御うつくしさを御らんするにもいよ〳〵中宮
の御心さしいやまさりにめてたくそおはします
二位殿中宮に申給やう春宮の御かひしやくにも
あせちの大納言のむすめこそさりぬへく侍れをやの
おほえもなきやうにておはすらむもいたはしく侍る
とのたまへはけによきことにも侍おとゝにも申

……

侍れはさりぬへきことにもこそとの給ふをり
ふし大納言まいり給へるに中宮よりかくなと

の給ふやかてあせちの大納言にとうくうの御かひ
しやくに御むすめあまたおはすなれは一人
まいらせさせ給へとおほせられけれは大納言は
さやうにはか〳〵しくみやつかひなとし侍へき
物ともにも侍らねともおほせにて候へはいつれ
にてもまいらせ候へきよし申されけれはをな
しくはおほい君をと中宮二位殿も御心さし
」（第一九紙）

侍とのたまへはそれはいかゝはゝも侍らねはことに
いま〳〵しくそのうへおさなくよりすてをき侍て
おいたち侍ありさまたにしらす侍れはまして
さこそふしきに侍らめと申されけれはたゝさも
あれそのひめ君まいらせ給ふへきよしかさねて
おほせられけれはそのうへはともかくも仰にしたかふ
へきよし申ていて給ふふしきなることかないかゝ
きこしめしてあなかちにのたまふらんはゝなくて
のちは我身たにみることもなくおいたちぬらんも
……
しらぬいかさまみてこそとおほしめしてすくにたいへ
わたり給てめのとをよひいたし給へはいまさらなる
心ちしてまゝはゝのゝ給しことき給ておはし
たるにこそとむねうちさはきてさしいてたり

ひめはとたつね給へはこれにと申思ひよらす申
へき事ありけ参に入へきよし仰られけれは
物おほえてはみたてまつらぬをやなれはつゝましく
はつかしき心ちしてとみにもいて給はねはとく〳〵と
のたまへはいさりいて給ふうちはちらい給へるありさま
」（第一八紙）

うつくしくあてにあいきやうつきさしもいつ
きかしつく御むすめたちにはるへくもなく
かみのかゝりよりはしめおろかなる所なく見え
給へはうちの宮つかへもかたわらいたからすと思ふ
にもとし月このかすにもおもはすうちすて、
おきしこと子なからもはつかしくいかにうらめしく
おもはれつらんと我なからくやしくそおほえける
さても中宮の御かたより春宮の御かひしやくに
おほせられ侍いかゝおほしめすとの給へははつかしくて
……
いらへもせられ給はすめのといかなることをかの給
はんすらんと心さはきしておほえつるにひきかへ
おもはすにかくなとの給へはうれしさもかきり
なくそおほえけるいつとなくかゝるかすかなる
御しきにておはしませはあさ夕心くるしく侍なり
いかやうにも御はからひにてこそ侍れと申けれは

大納言けにさこそとし月おもひつらむとあはれに
心くるしく我もをやなれは心のをろか侍らねとも
よろつにかなわぬことのみ侍てすこしつるに
めやすきさまにておはせんはうれしくこそ侍へけれ

」（第四紙）

ようゐしてめしあらはまいり給へとの給て
かへり給ぬ人〳〵かすならぬやうにおもひをとし
めつるにかゝることあれはいとうれしくそおほえ
ける大納言北の方にかうとかたり給へは心の中にねた
ましくおほしめしてたいの君はさようのみや
つかひしとけ給なんやわか御心はかりこそむすめ
とてかしつきたまへともいやしきふるまい
し給ふをはしり給はすやはちをもかへりみす
なとのたまへはたひ〳〵かなはしと申つれともさして

……

それをとおほせらるゝをはいかゝともかくも申
へきまたみるめはわか子なからもさしてかたわ
にも侍らすとのたまへはいとゝやすからぬ心ち
してさらはおなしさまに三人なからまいらせ
させ給へとのたまふのこりをはめしもなからんに
いかゝまいらすへきとてわらひ給ふそのゝち日つ
ゐてなとさためて二位とのより色〳〵にきぬ
はかまよりはしめておもひよらぬくまなくて
いつしかかすならぬ御すまゐひきかへてねうはう

」（第七紙）

うへわらははした物にいたるまてまいりつとひ
はなやかにいてたち給へはまゝはゝのうへをはし
めてつき〳〵の人まてもいかなることにかこの
たいにかゝることのいてきぬらんとそねましくも
うら山しくやすからぬことにそおほしける
御まいりの日にもなりぬれはおもふにもすき
いかめしくめてたしみくしけ殿とそ申侍
わか宮を見たてまつれはうくしう（ママ）（たら）うたく
おはすれはかたしけなくもうれしくもおほえ
たまふいつしか春宮にたちたまふみくしけ殿

……

いたきまいらせてたまの御こしにのり給へは
くきやう殿上人のこる人なくそのさほうかた
はしいふも中〳〵ゆかみひか〳〵しきこと
あらんかしたゝをしはかるへし大納言もこれ
ほとにくわほうよき人をすてはてゝをき
けむことあさましくそおほえ給ふとうくう
こうき殿におはしませは御くしけ殿もをなしく
さふらひ給ふ中宮は人よりことに御心よせに

おほしめしてつく〳〵と御らんするにつけても

かたわらいたき所なくうつくしうおはすれは
御子の人にすくれてかゝやくやうにうつくしく
おはしますもことはりにうれしくおほしめして
むつましくし給ふこといへはさらなり春宮は
日にそへてうつくしうおいゝて給へは御かとおほ
しかしつき給ふことなのめならすくらまの
ひさもんはつせのくわんをむの御りしやうとふかく
おほしめして御めのとなと月ことにまいり給ふ
とうくうおよすけ給ふにしたかひてうつくしう
おはしますをみたてまつる人ことにちゝ御かとにも

なをすくれゆくすゑもたのもしき御さう
わたらせ給ふなととり〳〵に申けれは中宮の御
心のうちまたみくしけ殿うれしきなかにも
そらをそろしき心ちそし給ふさても一夜の
ゆめの中納言みくしけ殿御すのうちより見
いたし給てさもたくいなきちきりのほとに
かゝるいみしき人のいてき給へるとはいかなるゆめにか
しり給はんと御心の中にふしきにもあわれにも
おほえ給ふ中納言はまたあやなくうしないて

」（第一三紙）

ゆくゑもしらぬ人のをもかけわするゝひま

なくみやつかひも心に入給はねともさすかにうち
わたりにてこそ心をもなくさむるたよりにて
たゝうちわたりにのみさふらひたまふ月日に
そへてありし人の行えしらせさせ給へと神仏に
いのり給ふみくしけ殿はうち〳〵のおほえめてたく
すみたまふさまもつき〳〵しう心にくきさま
し給へるをいかにしてか見たてまつらむとつねに
うかゝひありき給ふほとにさりぬへき物ゝひま
よりたちよりてのそき給へはおもふにもす
きてうつくしうなまめかしう見え給へは

いつしかうちつけに心もあくかるゝやうにおほ□（え）
給へはそらをそろしなからつく〳〵とのそきたち
たまへは御としのほと廿はかりにやと見えて
かみのかゝりたをやかにうちきのすそにあまり
てあたりもかゝやくなといふ人はかくやとをし
はかられてゑにもかきとめて見まほしうそおほ
えける一夜のゆめをこそなへてならぬ心地
して心もそらにおほえつるにかゝる人も世に
ありけりとしつ心なくてむかし見しゆめとは

」（第三六紙）

かけてもおもひより給はす行えなき人の恋しさ

」（第三五紙）

この御をもかけにうつろひて人しれす明
くれなかめ給ふみくしけ殿御めのとさてもこの
ことをは中納言殿はいまたしらせ給はしあはれ
かくとたにしらせまいらせ侍はやかゝる御覚も
たれゆへにかなと申けれはみくしけ殿おもひ
よらぬこと、の給へはけにもとおほえて申も
いたさす中納言は日比はわするゝひまなく一よ
のゆめのみおもひあかしくらし給しにいまは
御くしけ殿、御をもかけ身をはなれぬ心ちして
よるひるうちにのみさふらひ給てくら人なとを

……

かたらひ給へとも心をつくす人おほく侍とも
そのかひなくてうつもるゝたくひのみ侍と申
けれはなをあやにくに心まさりしてみやうふ
をかたらひせめありき給ふまめやかにしほれかち
にてあなかちにの給へはいたはしくおほえてもし
さりぬへきついても侍はとそ申そのゝちみく
しけ殿、てならひすさひ給へるあふきをとり
てつかふをりふし中納言まいり給てよりをはし
ましてさても一日のことはとのたまふしのひ

やかに申侍へきついても侍らぬほとにいまた

」（第一〇紙）

もらしいて侍らすと申けれはいとほいなしや
心にいらぬほともあらはれにけりとたはふれ給ふ
このあふきなるてはたれならむよしありても
みゆるかなとの給へはこれこそみくしけとのゝかき
すて給へると申けれはゆかしくおほえてとりて
御らんすれは

人しれす見しをもかけはかはらねと
おもひもよらぬ雲ゐなりけり

うちすてかき給へるしもみところありて
よし〳〵くうつくしうちをきかたく御らんすれは

……

見しやうなる心ちしてうち返し〳〵御らんす
れはゆくゑしらてやみにし人のてににたる
かなと御むねさはきてもしそれならはいまた
わすれさりけりとうれしくもふしきにも
おほえてこのあふきしはし見あはすへきことの
侍れはとのたまへは人に見すなとおほせ事
は（へん）へりつるにおもひよらすと申せは人には
たれにか見せむととてとりて我御もとにて
むかしのあふきのつまに見あはすれはつゆまかふ

」（第三〇紙）

（一紙分欠）

ならむとてわらはをいたしてみせ給へは大納言の御
つほねはこれにかとたつね給へはさふらひ給
と申うれしくおほえてさらて申
へきこと侍人つてならてたちいて給へ
とおほせられけるをわらわこのよし申
けれはたゝいま人しけく日むきあし
きほとなれは我ならすとも申させ給へとこ
たへ給へはくちをしかりける御心のほとかな
……
さらはこれまいらさせ給へとて御ふところ
より御ふみとりいてゝわらわにあつけ給ふ
なに心なくもちてまいりたれはいつくより
そとて御らんすれはむかしのあふきに
ありしあふきをとりくしてうゑに
かたみとてかきとゝめけるみつくきの
あと見るたひにぬるゝ袖かな
これを御らんするにふしきにもあはれさ
御なみたせきかぬる心ちしなからゆくゑ

」（第三紙）

しる人とては御めのとよりほかにはなかりけれ
はさらぬ女房たちあやしく見とかむること
もやとつゝましくてこれはもし御人
たかへにてやとてあふきはかりをとゝめて
御ふみは返し給ふわらはたちかへり中納言殿
たつねたてまつれともみえ給はすまた
まいりてかうときこゆれはいさしらぬふみ
なからひろゐこそせめとてわらひ給ふ
……
人〳〵まいりけれはさらぬやうにてひき
かくし給ふ御めのとかやうの事をきゝて
いとをしくもあわれにもおほえてはやしり
給けりとうれしくも一かたならぬ心ちしてつい
には神仏の御はからひなれはたのもしくそお
ほえけるかくて御ふみは日をへてひまなく
かよひける身つからもつねにたゝすみ給ふ
御めのとよひいてゝとし月一夜のゆめをさ
むるよなくおもひなけきし心の中かこつかた
なきまゝに神仏ならてはたのみたてまつる
ことなくいのりつるしるしにやおもひかけぬ
たよりにみつけたてまつりしうれしさも

」（第一一紙）

おろかにやとなみたうちそへてかたり給ふ御め
のとことはりにいたわしくてそゝろになくより
ほかの事なしかくてもなを身つからとし月
のおもひわたりし心の中はるゝことたにも
かなわすはうき世になからへてもかひあるへき
ことかわといつしかうらみせめ給へは御めのとけ
にさこそと御心の中をしはかられてこのよしを

……

もらしうかゝひけれはいさやむかしおもひ
かけさりしゆめたにもくやしくこそ侍に
いまはましてゆくすゑしらぬことは人きゝ
くるしうとりかへさぬわさにも侍と心つよく
のたまふもことはりにきこゑわつらひてすくる
ほとに中納言殿かくのみ心なかきこと世にあるへ
きことかわたゝいまは日むきよからんをりし
かるへきやうにたはかりておはします所へ
みちひき給へとの給へは御めのとけにはしめたる
ことならはやうしろめたくもおほすへきと

」（第二紙）

心の中にあむしてしつかなる夜むかしいまの
御物かたりなと申てさとへいてさまにやをら
みちひき入たてまつりて我身はいそきまかて
ぬ中納言はひころ心をつくししつみにし心
のうちいつしかなれかほにかつうらみつゝかたり
給へはみくしけ殿はいかにしてか入をはしけんと
心やましくおほえてうちそむきてい給へ
とさすかにいわ木ならねはあはれもすくな
からすよもすからなみたと（と）にかたらゐ
あかし給ふみしよりもかきりなくねひま

……

さりにほひくわゝり給へりおきわかれ給も
物うくおほせともあやにくにあけぬれ（は）
人めつゝましくとそゝのかし給へは我にもあらぬ
心ちしなからいて給ぬいまさらなる心ちしてやかて
御ふみかきてたてまつり給ふ

むすふてのしつくやいとゝそめつらむ
けさのたもとをひきそわつらふ

御返（こと）もうゐ〳〵しき心ちしてとためらひ
給へは御めのとはしめたる御事かはといさめ

」（第一五紙）

申けれはしふ〳〵にかき給ふ

山みつのすまてひさしくなりぬれは
くむともいかて袖はぬるへき

そのゝちはよをへてかよひ給ふほとに

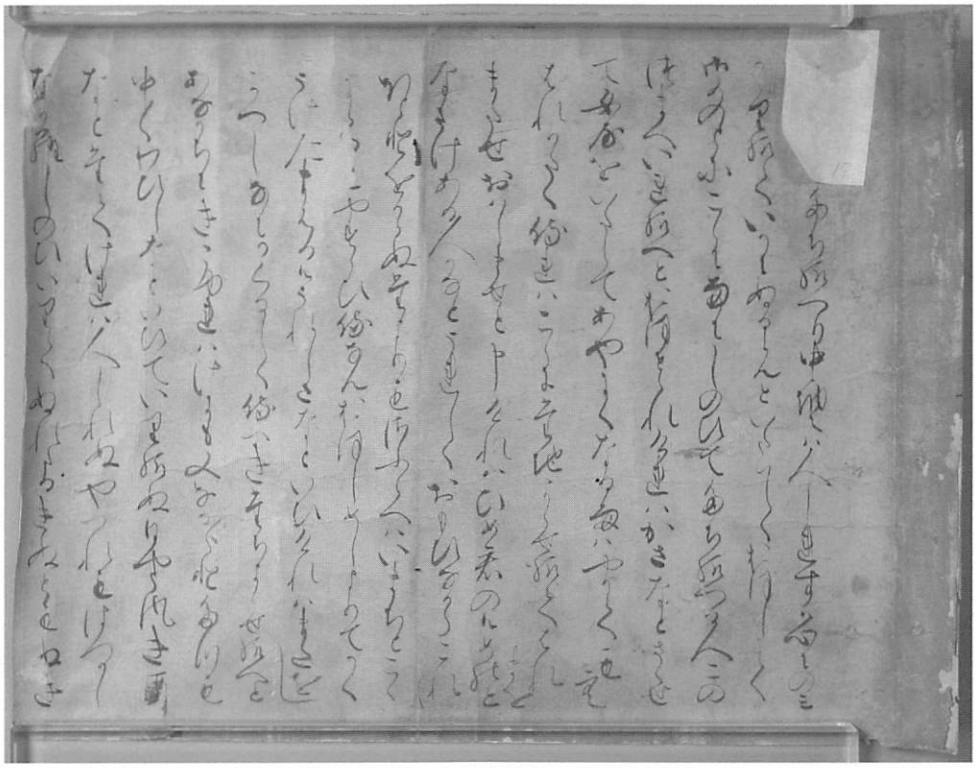
つ、むとすれとみな人もりき、ていと
よき御あわひなりと申あひける中納言
はいつしかとしのふもくるしさとへいて給へ
とのみいさなゐ給へともしはしとためらい
給ふほとにみくしけとの、御さとへいて給へは
……
中納言殿もわたり給へり大納言すてをき
し人のこれほとにくわほうさいわゐ心の
ま、なるうれしさよともてかしつき給
ことかきりなしま、は、しはしのちしらぬ
よをと心よからすい、けれともさのみくたし
いふへきやうなけれはもろともにいか、ともて
かしつき給けりこの御はらにもひめ君たち
をはすれともおよひ給はぬそくちをしきや
さて中納言との、御すまゐおもふやうならすとて
むかしのあまやとりをみかきしつらひて
もろともにすみわたり給てあかしくらし給ふ
みくしけ殿はつせへまいり給てむなしからぬ
仏の御ひきあわせもたんとくいと、ふかくのみ
たのみたてまつり給ふ中納言のち、は、うへ
き、給てよろこひ給ふことかきりなし中宮
」（第八紙）

もとよりしらせをはしましたることなれは
あわれにもふしきにもおほしめしけりかくて
とし月ふるほとにわか君三人ひめ君二人
……
いてき給てとり〳〵にかしつき給ふことかきり
なしさて春宮十三にて御けんふくあり
やかて御くらゐにつかせ給ふしも月になりぬれ
は御けいたゐしやうゑなと世のひ、きよ、に
かわらす御せちなとことにはなやかに殿上人
心をつくしこのいとなみにてそ侍けるうゑの
御すかたいとうつくしくおはしませは院のうへ
かきりなくよろこひおほしめしけりやかて中宮
いんかうかうふり給て女院とそ申侍ち、の大将殿
大臣になり給ふあせちの大納言とのはみくしけとの、
申されけるにや内大臣になり給中納言殿、
ち、は右大臣になり中納言は大納言にあかり給ふ
きんたちはみな中将少将とり〳〵にせうしん
ありてめてたしともいふはかりなしさて
大納言のひめ君ことにすくれてうつくしく
らうたくおはしましけるをた、人には
あたらしくうちへまいらせんとおほしかしつき
」（第一二紙）

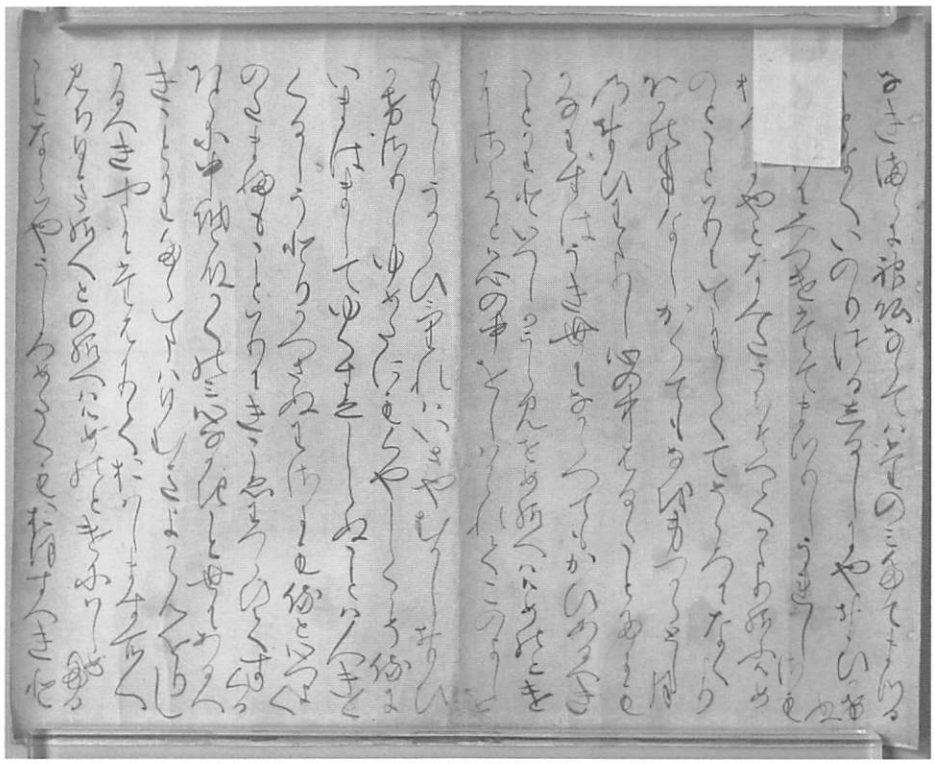
給ふをみくしけ殿いかゝしていゝとゝむるわさも
かなと心の中におほすせめてはら〳〵にて□
……
おはしまさすくるしきことにしそと
わひ給ふうちにもひめ君の御ことをふかく
御心にかけてひやうへのくら人といふ人に
みくしけのむすめまいらせよときこへま
ほしくおほせとも大納言いかゝとつゝましく
なとおほせありつたへきゝて大納言我思ふこと
かなゐぬる心ちしてうれしく人しれす
おもひかしつき給ふをみくしけ殿なにとやらん
しふ〳〵におなし心によろこひ給はぬこと心えす
」（第九紙）

おほしたり中将うちへ参り給へるついてに御ふみ
あそはしてこれいもうとの君のもとへつたへて
御返事いそき御らんせらるへきし仰らるれ
は中将うちかしこまりてとのゝおはしまして
うゑの御ふみとてとりいて給へは大納言うれしく
かたしけなくおもひよろこひてみ給へはいとう
つくしくあそはしてちいさくむすひ給へり
とこ夏とおもふかきねのなてしこをわれ
ならさらん人におらすな
……
はゝうへはむねつふれてわひしくおほす□（にカ）
大納言はうれしさのまゝに御返事かき給へと
すゝりかみとりいてゝそゝそのかし給へとはつかしけに
うちそはみておはしますをいまやうは人の
いふまゝになひくなんよきことなりおしへ
たてまつらんとせめ給へはのたまふまゝにかき
給ふ
または世にたれかをるへきとこなつの
花もまたしきしめのうちをは
」（第三七紙）

中将御返事もてまいりたりいそき御らん
」（軸継紙）



図版一



図版二